

援助者としての教師

堀内 久美子

Teachers Support Students

HORIUCHI Kumiko

縁あって3年間看護学部でお世話になりました。臨床経験のない私を皆様が温かく迎えてくださいましたことを心から感謝しています。看護学ゼミや院生指導の体験から、専門領域が異なっても、援助専門職をめざす学生の学習と成長に「向き合う」活動の共通性のようなものを感じ取りました。養護教諭養成の経験も振り返りながら、彼らを指導する教師の役割を考えてみたいと思います。

1. 大学生の4年間

大学生の4年間は、成長の著しい時期です。彼らは専門の知識・技術を身につけるだけでなく、感性を豊かにし、同世代の若者との交わりを通じて、また教師との接触を通じて、人間関係や「社会」を学んでいきます。彼らはまた、自身の意見や思いを表現し、そのことが相手にどう受け取られるかを配慮して行動することができます。急速な成長は、子どもが直立二足歩行を獲得するのに似た質的な変化といえましょう。4年間のほぼ中間の時点で成人の日を迎え、おとなの仲間入りをします。卒業直前の姿から見ると、入学式の頃の顔つきがなんと幼く見えることでしょう。

2. 成人の学習者

「大学生は幼稚になった」「自分で学ぼうとしないで、与えられるのを待っている」などの教員の嘆きもよく耳にします。前川¹⁾は、「教師は学生のそのような面を強調して見てはいないだろうか」と疑問を投げかけ、常に学生を保護し導くという教師のまなざしが問題であるとして、「学生の主体性を育むために、教師が学生を1人のおとなとして接してみよう」と提案

しています。これにより学生が自分を責任ある存在として自覚し始めることが期待されるからです。「成人」についてクラントン²⁾の定義をみると「みずからの文化やサブカルチャーの中での成人期の社会的役割を引き受けるようになった者」であり、何歳かという意味での年齢ではなく、「社会的な意味で自立しているとか『成長した』状態」としています。クラントン³⁾はまた、自己決定型学習を重視し、自己決定性をおとなの学習者の特性として見るのではなく学習者が歩むプロセス（一人一人の中で変化と成長をもたらすプロセス）としてとらえ、教育者が自己決定型学習を奨励し援助できるとしています。



堀内久美子 教授

3. 援助専門職の活動

ナースが援助専門職であることは多くの人が認めるところでしょう。福祉や心理などの分野でも援助専門職と呼べる職種が活動しています。少し古いことですが、学際的学会である日本生活指導学会の第7回研究大会（1989年）の全体会（シンポジウム形式）は、「援助専門職は『生活』にどうかかわっているのか」と題して開催され、福祉、看護、教育の各分野からの実践例を含めた報告を受けて参加者全体で活発な討議が行われました。福祉分野からは、社会福祉関係の多様な援助専門職の活動の共通点は、経済的援助とパー

援助者としての教師

ソナリティの発達の援助を統一的に行うこと、問題解決するのは主体としての生活者であり、援助者は共同参加者であることなどがあげられました⁴⁾。また看護学分野からは、個人の生き方や環境を総合的にみて改善していく全人的アプローチが看護の特質であり、自己理解、自己変革と創造的な自己実現が行われるような援助が期待されるとの発言がありました⁴⁾。教育学分野の碓井⁵⁾は教職=援助専門職と仮定するシエマが学校観・教師観の変革を迫っているとして、現代社会の『競争と管理』の原理が学校をも支配しつつあることに気づき、それがいかに教師も子どもも孤立化させているかを見つけるならば、子どもが未来の生活が見えぬまま「いま」を生きることを強いられている実態がつかめること、援助とはこうした事実心に心を寄せることから始まるのだと述べています。

教師の一員である養護教諭についての私の見解を追加するならば、養護教諭が援助専門職であることは疑いのないところです。養護教諭は子どものニーズを的確にとらえてどのような援助が適切か判断し実施し、必要に応じて学校内外での連携をとっています。この場合、子ども自身の身体感覚や意思を重んじていることはいまでもありません。

4. 援助にひそむ支配性

援助はその人の思いを尊重しその人の希望に添って実施するのが常道です。しかし、信田⁶⁾は、わが国では《援助》は「もらう、あげる、という贈与の意味付与」によって勾配関係が発生しやすいこと、その勾配は支配関係に転化することを鋭く指摘し、「援助-被援助のシーソーは放っておくと援助者が上になってしまう。だから絶えず自分の側に『重し』をかけなくてはならない」と主張しています。その「重し」とは援助者と被援助者の等価性の保証であり、等価性の保証のために必要なのは、①援助にまつわる価値を取り去っていくこと、②援助を「する」必要性をみずから問うこと、③支配性を自覚することであると提唱しています。これらの主張は非常に示唆に富むものであり、援助者が常に念頭におくべきことではないかと思えます。

5. 学習者の気持ちに添うこと

臨地実習の場で何か困難をかかえている学生への援助について、中西⁶⁾は「実習は辛いか」「患者さんの部屋に行くのは気が重いか」などの、学生自身がそこで感じているらしい気分に引き寄せて問うて見ることが近道だとして、「うまくその問いにのって話してくれるようなら問題はすでに解決の方向に向かい出したとみてよい」と述べています。見藤⁷⁾も、実習指導教

師が学生その時のありのままの気持ちを大切に、共感的に学生の話の話を聞いたことが学生の成長を促したという実例を報告しています。

「気持ちを聴く」「気持ちに添う」ことが大切だとわかっている、実際には事柄の成り行き（事実経過）の方にばかり気をとられてしまうことが多々あります。養護教諭をめざす学生は、学校の実習（養護実習）の際に保健室での対応について、観察・参加・実習という段階を踏んで、養護教諭から細部にわたり指導を受けています。「児童の訴えを受け止める」「気持ちを聴く」ことの重要性を個々のケースに即して学んでいるわけですが、そのことと「自分の気持ちを振り返る」ことは相互に関連していると思われます。

よい援助とは、結局のところ、いかにその人の気持ちを聴くかにかかっているといえるでしょう。電話相談のボランティア仲間でも、このことをしばしば話題にしています。援助は与える→受けるという一方向のかかわりではなく、相互に影響し合うこと、つまり互いに成長しあうことを心に留めて、よりよい実践に向けて努力したいものです。

文 献

- 1) 前川幸子：成人の学習理論と学習支援，看護教育講座3 看護教育の方法（藤岡完治他編），27-28，医学書院，東京，2002.
- 2) Patricia A. Cranton：Working with Adult Learners, Wall and Emerson, 1992, 入江直子，豊田千代子，三輪健二訳：おとなの学びを拓く—自己決定と意識変容をめざして，5，鳳書房，東京，2003.
- 3) 同上書，74-77.
- 4) 日本生活指導学会通信No.24（第7回研究大会報告号），20-21，日本生活指導学会事務局，1989.11.1
- 5) 碓井岑夫：現代の学校・社会と教師の自己成長，生活指導研究，7，5-20，日本生活指導学会，明治図書，東京，1990.
- 6) 信田さよ子：アディクション・アプローチもうひとつの家族援助論，134-140，医学書院，東京，1999.
- 7) 中西睦子：臨床教育論—体験からことばへ，145，ゆみる出版，東京，1992.
- 8) 見藤隆子：シリーズ 看護の原点 人を育てる看護教育，244，医学書院，東京，1988.